

第79話 (62頁) お百姓と馬

お百姓が馬にやる麦を買いに、町に出かけました。村を出たとたん、馬が家のほうに帰ろうとしました。お百姓は、むちで馬をたたきました。馬は歩き出しながら、お百姓のことをこう思いました。

「このおばかさんめ、わたしをどこに行かせようというのかしら。家に帰ったほうがいいのに。」

まだ町にたどり着かないうちに、お百姓は、馬がどろんこでひどいので、ほそうした道に出ようと向きを変えましたが、馬は反対のほうに行こうとします。お百姓は、むちでたたいて、馬を引っぱりました。馬は、ほそうした道へと歩き出しながら、思いました。

「何のために、ほそうした道に行かせるのかしら。ひづめがいたむだけよ。ほら、ここのかたいことときたら。」

お百姓は店にやってくると、麦を買って、帰り道につきました。家につくと、馬に麦をやりました。馬は食べはじめながら、こう思いました。

「人間はなんてばかなんだろう！ 私たちにりこうぶるのが大好きなくせに、頭のほうは、わたしたちより足りないんだから。何をあくせくやっているのかしらね。どこかへ、わたしをおいたてたけど。どこまで行ったって、帰ってくるのは、やっぱり自分の家なのに。はじめから、家にじっとしていたほうがよかったのに。あの人はだんろの上に横になっていられたし、わたしは麦を食べていられたのに。」

「久しぶりに長い話だけど、これで、馬のお話が3話続いている。」

「馬にやる麦を買おうと、馬を連れて町へ出かけたお百姓。家に帰りたくて抵抗を繰り返し、たびたび鞭でたたかれた馬。双方の行き違いが際立っているよ。」

「百姓は馬のためを思って行動しているのに、そんな主人の思いやりを馬は全く分かっていない。」

「無理解、曲解にも程がある。家にじっとしていて麦を食べていたらよかったと、最後に吠えているけど、だったら食べたい麦にありつけなかったんだから。」

「馬は不満ばかり漏らし、なんでも自分中心で料簡が狭い。」

「百姓の心、馬知らず、か。『あの人』と、呼び方もすごくよそよそしい。」

「トルストイは農園主として農奴のためを思っているいろいろやろうとしたのに、農奴には真意が理解できず、受け入れられなかった。そういう対比にも通じるのかな。」

「もっと拡大解釈すると、馬は民衆で、百姓は為政者。よいことをしても、民衆は狭量でかえって反発される結果になりかねない。」

「うーん、読み方が深い（首を縦に振る）。そんなこと、考えもしなかった。」

「上司と部下、あるいは、教師と学生、とか、いろいろ類推できるよ。」

「男と女、夫と妻にも当てはまる。この場合は、ただ、こうするぞとか、黙ってついて来いとだけ言って、説明もせず、理解も求めない夫の側の問題になってくるのかな。」

「男としては、切実な話になってきた（苦笑い）。アーズブカでも、お百姓が最初に町に連れて行くわけを馬に話していたら、展開は全く違ったはずだ。」

「裏返せば、百姓の、あるいは、夫、為政者の方に説明責任があるということか。」

「これまでの話は大体、弱いものに共感する視線だった気がするが、この話に限っては『上から目線』じゃないか。」

「私たちの読み方も、つられて上から目線になったかな。この話、子どもたちはどう受け止めるだろうか。ちょっと想像しにくい。」

「百姓が親で、馬が子ども、なんて、絶対に思わない。親の心、子知らず、の教材にはならないし、ひょっとしたら、逆に、馬と親が重なったりして……」

「うちの親は、全く私のことをわかっちゃいない、なーんて。」

「ところで、町に麦を買いに行くんじゃなくて、麦を荷車に積んで百姓の家に宅配する商売があったら、歓迎されただろうに、ね。」